



第310号・2021年7月1日発信

同志社女子教育 ―その「知られざる」源流を尋ねて―

坂本清音同志社女子大名誉教授

(編集者のまえがき)

同志社ファンを増やす会が8年目を迎えて、さらに深耕すべく、野本真也先生の奨励を基に同志社や新島について深く学んで参りました。

今回から更なる理解のために、同志社の女子教育についても知ることが有効と考え、『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校(1876年-1893年)-アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして-』(上・下巻)の著者でもある坂本清音先生に投稿をお願いしました。

ご存じのように坂本清音先生は英文学の教授ですが、ここ30年くらい、女学校の歴史研究に従事しておられます。そのことから、史実に忠実な「歴史家」とも思っております。

内容を正しく理解していただくために、「同志社ファン ZOOM 講座」にお出ましをお願いしています。今号のZOOM講座は7月24日(土)を予定しております。ご参加をお待ちしています。

* * * *

<はじめに>

同志社女学校が創設された頃の状況についてリアルタイムで詳細が分かり始めたのは、実は、今から30年くらい前のことです。それは同志社大学人文科学研究所のプロジェクトで、「アメリカン・ボード宣教師文書」の研究が始まったことに端を発しています。その研究会は1989年4月に発足し、15年間続いたプロジェクトでした。各研究員は特定の宣教師を分担し、マイクロフィルムに収められた書簡を活字化して内容を紹介し、討議をするという形で進められました。

筆者は同志社女子大学から参加した研究員でしたので、女学校に赴任した女性宣教師の文書を扱うことを希望し、初代 A.J. スタークウェザーを皮切りに、次々と女学校に派遣された女性宣教師たちの文書に取り組みました。

この研究会は、手書きの文書を読み取って活字化するという、ある種、職人技のようなことに多くの時間を割いて、発表する形だったことの大変さと同時に、自分の発表することが全て、初めて公表される「リアルタイムの同志社女学校の姿」であるという愉快さ、面白さに夢中になって、研究を進めることができました。そのことは大変得難い経験でした。

今後の展開ですが、今回と次回の2回にわたって、今から 145 年前の、同志社女子教育の現場についてお話しします。

先ずは、未開の国、日本で、キリスト教の女子教育に携わることを決意し、はるばる海を渡って来日した女性宣教師のことと、彼女たちを海外伝道活動へと送り出し、その費用全てを本国で支えた団体、ウーマンズ・ボードとその母体であるアメリカン・ボードについても、学んでおきたいと思います。

＜ウーマンズ・ボードと同志社女学校＞ 次の2枚の写真をご覧ください。



(同志社社史資料センター蔵)



(5、7、10 は同志社同窓会蔵)

それ以外は女子大学史料センター蔵)

この女学校最初の校舎と、当時女学校のキャンパスを颯爽と歩いていた、これらの女性宣教師の姿を、初めてご覧いただく方も多いのではないのでしょうか。

では、この写真の背後にあったウーマンズ・ボードとはどのような団体だったのか、からご説明しましょう。

皆様がよく耳にされるアメリカン・ボード、それは日本では、同志社の強力な支援団体で、新島を準宣教師として日本に派遣した団体ですが、その団体と協力して活動する女性団体がウーマンズ・ボードです。

1869 年ボストンで、最古の女性伝道局としてスタートし、引き続き同年 10 月にはシカゴに中部ウーマンズ・ボードを結成。1873 年にはサンフランシスコに拠点を置いて、太平洋ウーマンズ・ボードを結成しています。ちょうどこの時期は、アメリカン・ボードの日本伝道開始、とりわけ女性宣教師派遣が活発になる時期と重なったこともあり、次々と独身女性宣教師が日本に送られてきました。

その活動の 3 本の柱は、次のようなことです。

- ① アメリカン・ボードと協力して独身女性宣教師の海外派遣を支援し、そのために必要な資金を集めること
- ② アメリカ国内においては、部会を通して、宣教師に関する情報を広め、伝道精神を涵養すること
- ③ 子どもを対象に、宣教の仕事に対する興味を喚起せしめ、早くから募金に参加できるよう訓練すること

特筆すべきは、その運動の一環として、アメリカ独立 100 周年記念募金を行っていたウーマンズ・ボードが、機関紙『女性のための生命と光』誌上で、6000 ドルの募金を「京都ホーム」のためにと訴えていたことです。この募金で写真の校舎が建ったのです。さらに、写真にある女性宣教師を次々と派遣してくれました。当時、日本でキリスト教女子教育ができる日本人などいなかったのですから、彼女たちの働きは大変貴重なものだったことがお分かりいただけることでしょう。

<二つの創立記念日(1876.10.24 / 1877.4.21)>

同志社英学校の創立記念日は 1875 年 11 月 29 日とされていますが、女学校には、二つの記念日説があります。

- ① J.D. デイヴィスの周到な準備と、A.J. スタークウェザーによって開始された「京都ホーム」の設立を記念する 1876 年 10 月 24 日
 - ② 新島襄が京都府に届け出て、正式の女学校となった 1877 年 4 月 21 日
- ① の場合は、アメリカン（ウーマンズ）・ボードの援助と深い関わりがあります。



(同志社社史資料センター蔵) (女子大学史料センター蔵)

(女子大学史料センター蔵)

右側の写真は、現在京都迎賓館が建っている場所にあった旧柳原前光邸の「掌中雲上抜錦」です。デイヴィスはその邸を借家して住んでいましたが、スタークウェザーはそこで「京都ホーム」を始めました。その時の様子をデイヴィスが女学校創立 25 年を記念して募金を訴えた報告書の中で、次のように書いています。

「スタークウェザーは 1876 年 4 月 7 日に日本に到着し、すぐに京都に来て、私たちが住んでいた、古い柳原屋敷で共に暮らしました。この屋敷は御所の東側に位置しており、50 以上の部屋があったのですが、彼女は美しい庭に面した一番大きくて、一番いい部屋を 3～4 室使って」授業を始めました。

次にご紹介するのは、スタークウェザーが「京都ホーム」開校をウーマンズ・ボードに知らせた書簡の 1 文です。

“We began regular school exercises Oct.24, just five days after the anniversary of the first entrance of Kioto by Mr. Davis with permission to live in that city.

普通に言えば、「デービス一家が神戸から京都に引っ越してきた約 1 年後」で済むことを、デービスが「許可を得て初めて京都に住むことが出来た記念の日」の 5 日後に、と表現しています。当時、宣教師が内陸部に住むということは、これほど大変な出来事だったのです。

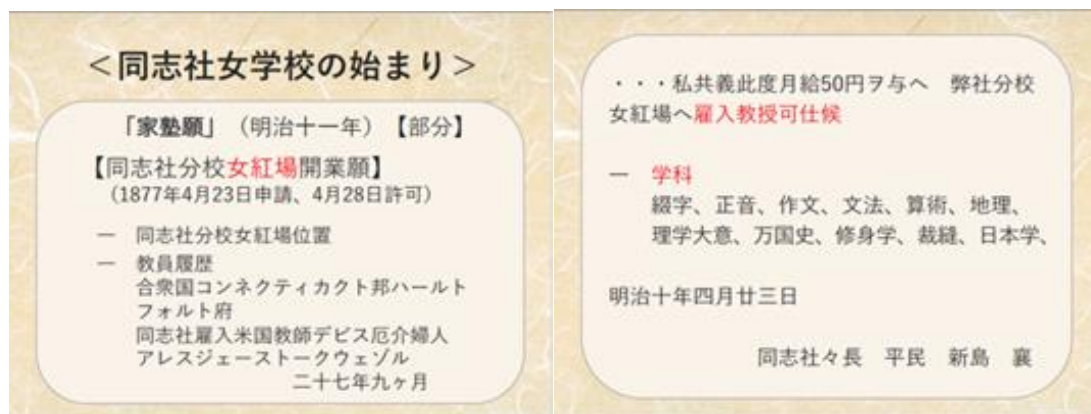
文中に出てきたデイヴィスは、神戸時代に女性宣教師タルカットやダッドレーを助けて、女子教育に携わっていました。新島が京都に男子のための学校を建てるのなら、それとペアの関係にある女学校を建てるべきと、神戸にしながら、女性宣教師の派遣をアメリカン・ボードに訴えていたのです。

彼は、女子教育の体験から日本の女性が、キリスト教の価値観を教えられることにより根本的に生き方を変えるのを目の当たりにしていたのです。

＜女学校創立時の新島襄の役割＞

同志社女学校は、まだキリシタン禁制の名残を止める明治の初め、1100 年続いた古都京都に、最初のキリスト教主義女学校としてスタートしました。内陸部京都で学校をスタートするには、日本人である新島が校長となり、宣教師を教師として雇い入れるという形を取らないと実現不可能でした。その後も校名変更や、2 人目 3 人目の女性宣教師雇入れなどで、新島校長による申請が必須で、その役割はますます重要性を増していきました。

次に挙げていますのは、女学校創設時に新島が届け出た「家塾願」（部分）です。



この時点で、校名は「同志社分校女紅場」となっていますが、教える「学科目」との矛盾を指摘されて、半年後には「同志社女学校」と改名する願いを届け出るようになります。

<同志社女学校創立当初の試練と「その後」>

同志社女学校はキリスト教主義を標榜していましたので、地元からの入学希望者は極めて少なく、創立以来 30 年間、全校生徒数が 200 人を超えない小さな経済的にも貧弱な学校でした。女学校存続の難しさは経営面だけでなく、学校内部の教育面でも次々と試練が襲いましたが、「キリスト教に基づく女子教育」という基本的目標が揺らぐことはありませんでした。

その苦難は、同志社英学校が 1 年前から経験していたものとは、対象も内実も違うものだったと言えます。それは、明治の初め、まだ「異文化摩擦」という言葉もなかった頃の日本で、京都で、そして同志社女学校の中で体験された歴史そのものでした。具体的には、女性宣教師たちはホームで女生徒と寝食を共にし、毎日の生活を通してキリスト教の価値観と、それに基づく行動を植え付けつけることを大切にしていたのですが、それは従来の「女大学的」生き方とは根本的に異なり、そこで様々な衝突（異文化摩擦）が起こったのです。

このように、同志社女子教育の「知られざる」源流は、産みの苦しみを経た後も波乱万丈の現場でした。しかしながら、少人数であったがためにホームの生活を通して密度の濃いキリスト教教育を体験した女生徒たちは、卒業後も母校愛に溢れ、共に学んだ姉妹たちと共に、母校のために役立ちたいとの思いで見守り、支え続けました。

最後に、同志社女子大学が現在、3本の柱として掲げている「キリスト教主義・国際主義・リベラルアーツ」の特色は、今回お話しする同志社女学校創立期には、基本的な考え方としてスタートが切られていた、苗床はすでに育っていたと言えるでしょう。このことについては、今後の「同志社ファン・レポート」で考察したいと考えています。